

近代韓国文学と日本留学－李光洙と廉想涉

1. 李光洙と留学、そして啓蒙

李光洙は1905年8月頃、孫秉熙の紹介で一進会の奨学生となり、東京へ一次留学をする。1907年9月10日、明治学院普通部3年に編入する。

(1) 人道主義、浪漫主義、そして愛

1次留学時代から李光洙は文士を志向していたといえる。この時、彼は日本を旋風していた文学作品と思想論文を読みふけながら、彼自身も小説と評論を兼ねて執筆する文士思想家を志望していた。彼がこの時、『愛か』と『無情』、『幼い犠牲』等の短編を執筆する一方で、〈今日我韓青年と教育〉等の幾つかの評論を発表している。

明治学院時代は、李光洙にとって経済的苦衷のない安堵感と安定感に満ちた幸福な時代であった。李光洙は1919年1月に書いた独立宣言書〈朝鮮青年独立団宣言書〉を英語で翻訳するほど語学に才能があった。明治学院時代、彼に深い感動と感化をくれたのはキリスト教であった。キリスト教から再び彼を導いたのはトルストイ主義だった。李光洙は様々な方面でトルストイの影響を深く受けたと語った。‘トルストイ、イエス、仏陀の影響を順次に受け、私の無抵抗心はさらに深まり’（〈私が属する類型〉）といい、1930年度ある雑誌のアンケートには、トルストイ、仏陀、安昌浩の順番に書いている。彼がトルストイに接するようになったのは同級生の山崎俊夫によってである。李光洙が把握したトルストイ主義は一言でいうと博愛主義、非暴力主義、無抵抗主義であって、これらは李光洙が一生寄り続いた思想の一つであった。

李光洙の日本語小説の『愛か』は明治学院の校誌〈白金学報〉（第19号、1909.12）に掲載されたが、発表された最初の小説といえる。小説『尹光浩』は、東京留学生を主人公として当時の青年たちの浪漫的でありながら、退廃的な愛を同性愛というコードを通して全面的に現している。『幼い友に』は書簡文形式で、既に朝鮮で結婚した既婚者の主人公が同じ留学生の友人の妹に片思いをしたが、断れてしまう話を描いている。彼の指導が啓蒙でさらに固まっていくことを感じさせられる作品である。

(2) 早婚と情育

〈今日我韓青年と情育〉（大韓興学報、第10号、1910.2）は初期を代表する情育論である。今まで教育の主眼として重視されてきた智育、徳育、体育に対し、情育こそが教育の大道だと主張する文である。彼は人間行動の原動力を‘情’で見出し、情育は文

学によって生存できるといい、〈文学の価値〉（大韓興学报，第 11 号，1910.3）を論文として発表した。この情育論は、伝統道徳と教育論を批判し、個性の自由を主張し、文学を通じてこれらを振作するという点で、反伝統的で西欧近代的性格を有する主義・主張であるといえる。

浪漫主義的個人に対する李光洙の自覚は、朝鮮旧習に対する反抗と批判に繋がったが、即ち、早婚に対する批判と情育に対する自覚、啓蒙であった。李光洙の 2 次留学時期に該当する 1917 年に発表された『少年の悲哀』のテーマがまさに早婚という旧習によって個性が喪失され、自由な生活を諦めざるを得なかった朝鮮青少年たちの苦痛である。

2. 廉想渉と大正デモクラシー、そして〈万歳前〉

1) 廉想渉の留学

廉想渉（1987－1963）は、1912 年から 1920 年まで 8 年間日本に留学し、日本を通して西欧の近代を受け入れた。その当時、日本は大正デモクラシーの時代であった。1915 年、19 歳の時、日本軍陸軍中尉の長男の廉チャン渉の手助けで正規名門中学校の京都府立第二中学校に入る。1918 年 3 月京都府立第二中学校を卒業した後、東京に戻ってくる。1918 年 4 月慶応義塾大学文科豫科に入学する。彼が慶応義塾大学文科豫科に通ったのは、1918 年 4 月から 10 月までの約 7 か月間だった。彼は 1 学期を終え、2 学期に病気で退学した。翌年 3・1 運動が起こると大阪天王寺公園でデモを計画したが、検挙され未遂に終わった。その後、廉想渉は横濱印刷工場で職工をしていたが、彼自身も知らないうちに、新たに創刊される〈東亜日報〉の記者に任命され、1920 年に帰国した。

2) 大正デモクラシーと近代的個人主義

1905 年から 1925 年まで起こった大正デモクラシーは、大正時代（1912－1926）で日本において広がった民主主義と自由主義を追求する傾向と思潮を総称するものである。

幼い頃、家庭環境は廉想渉に多大な影響を与えた。祖父が漢字を教え、そのなかから封建的な儒教的習俗を習った。日本留学を通じて経験するようになった新たな近代的教育と社会風潮は、彼にとって、個人と自由、文学を知る決定的な契機となった。

3) 植民地知識人の個人主義

彼は〈個性と芸術〉（開闢 22 号，1922.4）で‘奴隸的慣習’、‘既成的観念’、そして‘偶像の権威’から脱する自己建設が生活の‘モットー’になるべきであると主張する。現代的生活の根柢が確保されるためには‘個性’の自由、‘自己解放’が先行され

るというのだ。

4) 『万歳前』と個人

『万歳前』は題名通り 1919 年 3・1 万歳運動が起こる前年の 1918 年冬、大正デモクラシーの熱風が席捲した東京と朝鮮を背景に朝鮮人留学生の内面と現実との関係に焦点を当てた作品である。

主人公のイインファは、1918 年東京 W 大学文科に在学中の留学生として登場するが、作家の廉想渉も実際 1918 年当時慶応義塾大学に在学していた。イインファは 1910 年代から 1920 年代に至る期間、当時有産層の留学生を典型的に現す人物だといえる。彼は早婚制度によって結婚した妻が危篤だという消息にも関心を示さないような社会からの制約から逃れようとする個人主義的論理を持った人物である。

『万歳前』における‘当代現実の把握は、その自身さえも思考と反省の対象にする近代的自我（イインファ）がその冷静な視線（現実を見る目）で表象として近代社会（東京）と実際としての前近代植民地（朝鮮）の落差を眺める過程（旅路）で触発されることで（挿話的構成）達成されたものといえる。’

この作品の冒頭を見ると、この小説の話者は既に 1919 年 3・1 運動以降の視点で話をしていることに注目しなければならない。1919 年 3・1 運動が終わったある時点であえて 1918 年、その時の話をする理由は何だろうか。自身の観念性と安っぽいロマンティズムに対する恥ずかしさが憤怒を経て、再び具体的な恥ずかしさに変わった。暖かい春が来て、別荘でも購入する時に戻ってくるというイインファの心情はひよっとしたら恥ずかしさかもしれない。